

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：13903

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520016

研究課題名(和文) 西洋中世十三世紀の認識論研究

研究課題名(英文) Research on Western Epistemology in the 13th century

研究代表者

藤本 温 (Tsumoru, Fujimoto)

名古屋工業大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80332097

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、西洋中世十三世紀の認識論研究の発展に寄与することを目的として、主にトマス・アキナスの記憶論と想起論を詳しく研究した。また、アルベルトゥス・マグヌスの記憶論と想起論の研究にも取り組み、トマス・アキナスのそれとの比較も試みた。その研究成果は、口頭発表のほか、論文として発表されている。トマス・アキナスによる『アリストテレス 記憶と想起註解』の日本語への訳出作業を終えて、現在、公表準備中である。

研究成果の概要(英文)：This study examined Aquinas' theory of memory and recollection in order to promote the study of Western Epistemology in the 13th century. It also investigated Albert's theory of memory and recollection, and tried to compare it with Aquinas' theory. The research achievement was presented at the conference of medieval philosophy, and published in the academic journal. My Japanese translation of the commentary by Thomas Aquinas on Aristotle's "De memoria et reminiscencia" is in preparation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：トマス・アキナス アルベルトゥス・マグヌス 記憶 想起 認識論

1. 研究開始当初の背景

(1)近年の「心の哲学」研究の進展に伴い、トマス・アクィナスの「心の哲学」にも関心が高まってきた。しかし、記憶や想起の機能は「心の哲学」の重要なテーマであるにもかかわらず、アクィナスの記憶論や想起論に関する研究は、国外にわずかにあるのみで、国内では皆無という状況であった。これは、日本ではアウグスティヌスについてはその記憶論や想起論が盛んに論じられていることと比するならば、研究の状況としては好ましいとは言えないと考えられた。そこで、アクィナスの記憶論・想起論の研究を軸とした、西洋13世紀における認識論研究の計画を立てることにした。

(2)アクィナスによる記憶論や想起論は、神学的著作においても扱われるけれど、最も詳しく論じられているのは『アリストテレス 記憶と想起註解』においてであるので、まずは、同書の日本語訳を完成されることをめざすことにした。同書の翻訳は、英訳とイタリア語訳があるが、日本語訳はまだなかった。そもそも、アクィナスによるアリストテレス註解の紹介は日本ではあまり進んでいないという状況であった。

2. 研究の目的

(1)本研究では、基礎作業として、まずトマス・アクィナスによる『アリストテレス 記憶と想起註解』の翻訳を詳細な訳注を加えて完成させることをめざす。その際、アクィナスとほぼ同時代人であるアルベルトゥス・マグヌス、ペトルス・ヨハネス・オリヴィ、ロジャー・ベイコンの他に、新プラトン主義の哲学者、アヴィセンナらの諸説に関する近年の研究を取り入れることによって、中世哲学研究者や他の関連研究者にも利用可能なものに仕上げたい。それによって、西洋中世の『記憶と想起』研究の、

日本国内における研究の基礎を作ることを目的とする。

(2)上記の(1)の基礎作業を行いつつ、記憶論や想起論、内部感覚論、*intentio* 論といった個別のテーマに関する研究を行う。具体的には、13世紀のマグヌス、オリヴィ、ベイコンはもちろん、14世紀のドゥンス・スコトゥスやウイリアム・オッカムの認識論の調査も行って、かれらの記憶論や *intentio* 論や内部感覚論をアクィナスの説との比較において明らかにすること、また、実践的認識との関わりをも考察することによって研究状況を前進させることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)トマス・アクィナスによる『記憶と想起註解』の翻訳(日本語訳)は、近代語訳を参照し検討しながら進める。近代語訳には、英訳が2点と、イタリア語訳が1点ある。そしてできるかぎり詳細な訳注をつけたい。上記の訳書のうち2点は、訳注はあまりつけられていない。他の1点は訳注が比較的多いが、内容はレオニナ版(によるラテン語テキスト)の脚注の影響を大きく受けている。本研究では、アリストテレスから、新プラトン主義、イスラム哲学、また現代に至るまで、広い視野から、記憶と想起に関する訳注をつけたいと考えている。

アリストテレスの『記憶と想起』については、古いところでは、Richard Sorabji の *Aristotle on Memory* (1972)が必読であるほか、2007年に David Bloch によって新しいギリシア語テキストが出版された。その他、フランセス・A. イエイツ『記憶術』(青木信義他訳、水声社、1993)、またメアリー・カラザース『記憶術と書物 中世ヨーロッパの情報文化』(別宮貞徳監訳、工作舎、1997)や、Janet Coleman による600頁を超える大

著(1992年刊)も参考にして研究を進める。

(2)記憶論を中心とする認識論に関する個別研究として、以下の二つのことを行う。

上記の(1)の翻訳作業を行いながら、アキナスはアリストテレスの記憶論と想起論をどのように理解したかという観点から分析を行い、さらに「記憶は賢慮の部分である」というキケロの言明の中世における解釈についても検討を加える。

intentio (その訳語には、概念、意図、志向、指向などさまざまなものが提案されている)という概念の用法について、F. プレンターノによる「志向的内在」に関するよく知られた言明の脚注であげられている、アリストテレス、新プラトン主義者たち、アンセルムス、トマス・アキナスの他に、ロジャー・ベイコン、アスコリのヤコブ、スコトゥス、オッカムの文献を調査して、志向性概念の歴史に関する論考をまとめる。西洋中世における intentio に関連する研究は多数あるが、代表的なものとして、Pasnau, R., Perler, D., Tachau, K.H., Spruit, L.de Rijk らの先行研究を検討する。

4. 研究成果

(1)「志向性概念の歴史」という論考では、F. プレンターノの『経験的立場からの心理学』のなかの「志向的内在」に関する脚注において挙げられている、アリストテレス、フィロン、新プラトン主義者たち、アウグスティヌス、アンセルムス、トマスらのうち、主要なものを取り上げて、それらの intentio 理論の主論点を提示した。他に、その脚注では名前が挙げられていない、ペトルス・ヨハネス・オリヴィ、ドゥンス・スコトゥス、アスコリのヤコブ、ウィリアム・

アニック、ウィリアム・オッカム、ペトルス・アウレオリらの intentio 概念をも分析した。intentio 概念を、理論的文脈と実践的文脈で用いられるものに分けるならば、本論考では主として前者の歴史の流れを明らかにしたことになる。

(2)「記憶について アキナスの場合」という論考では、以下の諸点を論じた。

アキナスはメルベケのギョームによるラテン語を用いてアリストテレスの『記憶と想起について』を註解している。その際、ギョームによる訳語の選択が、アキナスの解釈に影響を及ぼしていることがある。アリストテレスの『記憶と想起について』では、記憶に関わる動詞としてムネーモネウエインが用いられ、想起に関わる動詞としてアナミムネースケスタイが用いられるが、前者の完了形であるムムネースタイも用いられている。これらの最も基本となる用語について、メルベケのギョームの訳では、ムネーモネウエインには memorari という訳語が与えられるが、ムムネースタイの方は訳語が一定していない。トマスはその訳を参照して註解しているのであり、現代のアリストテレス解釈者たち Sorabji や Bloch との理解の違いの一因は使用されていたラテン語訳の影響もあると考えられる。

アリストテレスによる「記憶」の定義、すなわち、「記憶は感覚でも思いなしでもなく、むしろ時間が経過したときの、これらのものの habitus ないし passio である」という規定における passio (ギリシア語では、パトス)を、アキナスは、失われるかもしれない刻印が残っている状態と理解し、habitus (ギリシア語では、ヘクシス)を、より持続的に記憶している状態である、

と理解する。記憶に関する *passio* と *habitus* のこの区別は、短期記憶と長期記憶の区別に重ねて考えるなら理解しやすいのではないかと提案した。

今日の、パーソナルな記憶と非パーソナルな記憶の区別は、14世紀のドゥンス・スコトゥスにまでさかのぼることが知られているが、アキナスはその先駆となるような区別をすでに行っている。そして、アキナスは、アウグスティヌスに従って、感覚的記憶と知性的記憶を区別する。本研究では、こうした区別の組み合わせと、時間や過去の認識との関わりを検討した。知性のレベルでの時間性ないし過去性と、感覚のレベルでのそれとの関係の問題は、13世紀のスコラ学者たちにとって難問のひとつであった。そうした中でトマスは独特の見解を提示していた。

アキナスの、想起論の特徴は、想起を感覚に分類する点にあり、ここにはイスラム哲学の影響がある。アキナスがそのような分類を行うのは、内部感覚 (*sensus interior*) というイスラム経由の思想を受容することによって、人間の場合、内部感覚にも知性の働きが浸透していると考えているからであろう。アキナスの立場においては、想起の働きが身体の状態に大きく依存しているかぎり、それを魂の知性的部分の働きに分類することはできないのである。

本研究期間中に、アルベルトゥス・マグヌスの『記憶と想起註解』を読み、また『善について』『人間論』における、関連箇所の分析を行って、アキナスの見解との比較を試みた。そして、「記憶は賢慮 *prudentia* の部分である」というキケロの言葉の解釈について、アキナスとマグヌ

スの間には、次のような差異が認められることがわかった。マグヌスは、「記憶は賢慮の部分である」という言葉における記憶を、想起と理性に接近させる。すなわち、キケロの言葉における記憶を想起に置き換えて理性 (賢慮) に近づける。一方トマスは、感覚的なものである記憶が、理性的なものである賢慮の部分であることを承認していて、マグヌスのような置き換えを行うことはしない。トマスはマグヌスの見解をおそらく知っていたことを考えるなら、この違いは興味深い。さらに、賢慮がその主導的役割をはたす実践的三段論法に関する理解に関しても、両者の間にいくらかの差異が生じることも明らかにした。

(3)トマス・アキナスによる『アリストテレス 記憶と想起註解』の翻訳作業を終了した。現在、公表準備中である。今後の展望として、アリストテレスの『魂について』と『感覚と感覚されるものについて』へのアキナスによる註解や、他のスコラ学者たちによる註解の紹介および翻訳を行うことによって、今回の研究を発展させたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

藤本温、記憶と想起について アキナスによる、『中世哲学研究 VERITAS』、査読有、第32号、2013年、pp.42-62.

〔学会発表〕(計1件)

藤本温、記憶について、第229回京大中世哲学研究会、2013年6月29日、於：京都大学吉田泉殿

〔図書〕(計1件)

神崎繁、熊野純彦、鈴木泉編、講談社メチエ、『西洋哲学史 II 「知」の変貌・「信」の階梯』、2011年、総ページ448、藤本温「志向性概念の歴史」(pp.382-411)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

藤本温、海外雑誌論文紹介、『中世哲学研究 VERITAS』、第 32 号、2013 年、p.106
および p.109

藤本温、海外雑誌論文紹介、『中世哲学研究 VERITAS』、第 31 号、2012 年、p.71

藤本温、海外雑誌論文紹介、『中世哲学研究 VERITAS』、第 30 号、2011 年、pp.78-79

6 . 研究組織

(1)研究代表者

藤本 温 (FUJIMOTO, Tsumoru)
名古屋工業大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：80332097

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし